

「リトルブラウンマン (little brown man)」をめぐる一考察

——アメリカの包摂的視座から見た日本人の膚の色——

デイ多佳子

I はじめに

19世紀中ごろから始まった日本人のアメリカへの移民史、とりわけ戦前の西海岸において顕著に見られた日本人に対する人種差別の実態やさまざまな排日法案の成立、それらが極限に達した形で起きた戦時中の日本人・日系アメリカ人の強制収容の歴史に関しては、膨大な研究が積み重ねられてきた。

しかし、150年を超える移民史のなかで、日本人が「リトルブラウンマン」と呼ばれた時代と地域があったことについては、日本ではほとんど知られてこなかった。日本の研究者のあいだでは、「フィリピン系に対して20世紀はじめから“茶色”の“人種”という人種分類が定着していた」¹⁾ からか、「ブラウンマン」とはフィリピン人を意味するとの理解が支配的であった。

一方日本では、たとえば筆者の手元にある資料では、明治7年に改正された「小学読本第一」の第一に、「日本人は亜細亜人種の中なり」²⁾ との記述がある。この一節は「当時小学校に学んだ多くの子供たちによって暗記せられ、口ずさまれた。」³⁾ 明治18年に出た小学中等科読本巻ノ四の第二十一課には「亜細亜人種。一ニ黄色人種ト名ヅク」との記述もある。⁴⁾ 戦前の初等教育から、日本人はアジア人種、黄色人種だという教育がなされてきたからか、移民史研究においても、日系アメリカ人ないし日本人は、“黄色”“アジア系”といったカテゴリーに入れられて論じられてきた。アメリカにおいて“ブラウン（茶色）”のカテゴリーにいれられようという認識はほぼ皆無だったのである。

本稿では、日系移民史研究であまり取り上げられることのなかったアメリカ中西部で、1847年から今日まで発行され続けている日刊紙シカゴトリビューンから、日本人を「リトルブラウンマン」と呼ぶ記事を紹介する。

シカゴは、1890年までに人口が100万人を超え、その人口のほぼ半分は外国生まれ、つまり移民であり、アメリカ生まれの人口の半分はその子供たちという移民主体の全米第二位の大商業都市となっていた。⁵⁾ かねてからシカゴトリビューン紙は、東海岸のニューヨークタイムズ紙やワシントンポスト紙と並ぶ、中西部では権威ある新聞である。西海岸のロサンゼルスタイムズ紙を買収した今日では、全米第二位の購読者数を誇る新聞となっている。

そのシカゴトリビューン紙にはじめて日本関連記事が掲載されたのは、管見の限り、1852年12月1日であった。ペリー提督率いる、いわゆる「黒船」艦隊の内訳を紹介するものである。以後、日本を経験したアメリカ人旅行者やビジネスマン、宣教師の話や、シカゴを訪れた日本人の様子などが紙上で紹介されるようになった。

その際、紙上で日本人に与えられてきた呼称は、国名である Japan/Nippon から派生した Japanese/Nipponese、そこからさらに派生した、今日日本人に対する蔑称とされる Jap や Nip

であったり、もしくは Oriental, Mongolian, Asiatics といった学術用語としても使用可能な“集約的アイデンティティ”であった。従来から日本人が自らのカテゴリーとしてきた「イエロー(黄色)」は、管見の限り、19世紀には紙上で、日本人の呼称として使用されることはなかったのである。

ところが、日本が日露戦争を戦っていた1905年4月になって、日本人を「イエロー」ではなく、「リトルブラウンマン」と呼ぶ記事が紙上に登場した。日露戦争は、白色人種対黄色人種という人種戦争としての世界戦争の性格⁶⁾をもつ戦争だった。シカゴトリビューン紙でも、連日第一面で報道されており、「リトルブラウンマン」の呼称が戦争という時代背景と深く関わっている可能性は否定できない。しかし、紙面の制約により、ここではあくまでも、「リトルブラウンマン」の「リトル」と「ブラウン」の意味の分析を行い、当時の中西部におけるアメリカ(人)の日本(人)観を浮き彫りすることで、日本(人)観の根底にあるアメリカのパターンリズムを問おうとする試論である。

果たして「リトルブラウンマン」の呼称は特定の地域と時代に限定された特殊なものだったのだろうか。それとも現代にも通じる普遍的な意味をもっていたのだろうか。「イエロー」は日本人の呼称に使われたのだろうか。本論は、これらの問いへの答えを模索することで、多民族社会アメリカにおける日本人・日系アメリカ人の位置を捉えなおす新しい視座を提示しようとするものである。

II 「リトルブラウンマン」

管見の限り、日本人を「リトルブラウンマン」もしくは「ブラウンマン」と呼ぶシカゴトリビューン紙の記事は次の通りである。全部で12本、記事が現れた時代は、日露戦争中の1905年から1921年までである。ひとつの記事の中で、日本人が常に「リトルブラウンマン」と呼ばれていたわけではない。同じ記事の中で、ジャパニーズ、ジャップ、オリエンタル、モンゴリアンなどと共存する事例も多い。以下、文脈とともに、簡単に記事を紹介する。なお太字は、筆者による強調である。

1. 事例紹介

(1) “見た目” – 身体的特徴

1 KUROKI HOST AT BANQUET: Japanese General Gives Elaborate Dinner... . When half through the dinner, **the little brown man** rose to his feet and gave his toast President Roosevelt in the only language he can speak-his native Japanese-Capt. Tanaka translating... . (1907年5月31日付)

日露戦争で活躍した黒木為楨大將がシカゴを訪問したときの記事である。

(2) 対戦相手(敵手) – 野球記事

2 LOVE BASEBALL IN JAPAN: Maroons' Ex-captain Writes of Growth of Game. Fred Merrifield... Declares "**the Little Brown Men**" Quickly Master Intricacies of Sport (1905年4月23日付)

シカゴ大学の野球チーム Maroons の元キャプテンで日本チームのコーチを務める Fred Merrifield が東京から送った記事で、早稲田大学の野球チームとの交流を報じている。

3 BADGER NINE LEAVES TODAY, Wisconsin Players to Begin Long Trip to Land of Mikado...in order to keep in practice for their series of games with the agile **little brown men** in the far away land of chrysanthemum. (1909年8月22日付)

ウィスコンシン大学広報部の Ned Jones が投稿した、野球部の日本遠征旅行を報じる記事である。

4 MAROONS DEFEAT JAPS, 12-11, **Little Brown Men** Rally and Scare 1000 Alumni Fans ○○○○ Cap. Matsuda, who had led the attack of **the little brown men** in two successful innings, (1911年6月18日付)

5 JAPS PLAY WELL, BUT BAT IN A WHISPER, SO MAROONS WIN, 4-2 ...At least if **the little brown men from the orient** expect to realize their baseball ambitions .. (1921年5月11日付)

4. 5ともに、シカゴ大学と早稲田大学のアメリカでの対戦記事である。後者はシカゴ大学の日米野球を観戦した James Crusinberry の投稿記事である。

(3) アジアと移民関連

ワシントン DC からの特別寄稿の形で掲載された、Richard Weightman の論考3本に「リトルブラウンマン」が使われている。

6 CHINA'S HINT SHE MAY BAR AMERICANS PRODUCES EFFECT IN OFFICIAL CIRCLES. ... Japan, indeed, is not a customer but a rival, whereas China, if respectfully and fairly treated, could be made one of our most valuable commercial friends... . **The little brown men** are not all our fancy painted when it comes to close and prolonged contact. (1905年5月26日付)

米中関係、米日関係を説き、中国(人)を“顧客”、日本(人)を“ライバル”としているが、両者を「リトルブラウンマン」と呼び、アジア人に対するアメリカ人の猜疑心を表明している。

7 JAPANESE NOT SO MUCH TO BLAME FOR TRYING TO LEARN NAVY SECRETS ... the moral being that **the little brown man** had not been of the servant class at all... (1905年6月17日付) 海軍が日本人のコックや客室サーバントを雇うことを禁じたことについて、アメリカから学んだ他の外国人のほうがよほど問題があった、と日本人を擁護する論調である。

8 CHINA'S RETALIATION HITS AMERICA HARD BLOW IN HER TENDEREST SPOT...Cry of "White Man's Burden"... There are the Japs. - those wonderful **little brown men** when we are all in love with-why not the Japs? (1905年6月24日付)

南欧, 南東欧移民と日系移民を対比させた論考である。日本人移民の流入を“侵略”とし, 「愛している”からといって, そんなに騒がなくてもいいじゃないか」と, 非常に皮肉な, 自嘲する口調である。

9 JAPAN PREPARED TO FIGHT ...by the San Francisco board of education against the **little brown men** who want to attend the public schools. (1906年11月30日付)

横浜の駐日領事であるハリー・ミラーからの情報として, サンフランシスコの学童隔離問題を報じた記事である。

10 COLLEWIS HOME; HAS 'DARK'SECRET ...Col Roosevelt who as president sent him to look over the **brown brothers of this nation in Japan, China and the Philippines...** (1909年7月10日付)

当時のルーズベルト大統領の要請をうけてアジアを秘密裡に訪問したルイス大佐に関する記事である。日本, 中国, フィリピンの人間が, “ブラウンブラザーズ”と呼ばれている。見出しでは'dark'がbrownに掛けられている。なおルイス大佐はシカゴ出身で, 記事のトーンは婦子を喜ぶものである。

11 JAPS PHOTOGRAPH FILIPINO FORTS : Two **Brown** Men Arrested Taking Pictures at Corregidor Island (1910年3月29日付)

フィリピンのマニラで, 行動が怪しいと逮捕された日本人二人が“ブラウンマン”と呼ばれている。

12 NOW IS THE TIME TO DECIDE STATUS OF JAP RESIDENTS ...Danger from Immigration-**Brown Men** Anxious to be placed on same footing with whites in this country-... (1913年7月7日付)

白人(ホワイト)と同等に扱われたがる日本人を指して, “ブラウンマン”が使われている。

これらの記事のうち, 「リトルブラウンマン」が記事の見出しに使われているのは事例2, 4, 11, 12, 記事本文中に使われているのが1, 9, 10, 投稿原稿と思われる記事本文中で使われているのが3, 5, 6, 7, 8である。見出し作成は新聞社の編集者が担当したであろうことや, 他紙からの転載記事ではなく, 地元記者や地元出身の人間が書いた一編集者の手が入ったとしても一記事のなかに「リトルブラウンマン」が登場しているのは, シカゴとその周辺地域において日本人が「リトルブラウンマン」であることに一定の共通理解があったと言えるのではないだろうか。

一定の共通理解とは, “見在目”“敵手”“アジア系”に通底するコンセプトがあったというこ

とである。そのコンセプトを浮上させるために、次に「リトル」と「ブラウン」のそれぞれの意味を考えてみる。

2. 「ブラウン」とは

「ブラウン」の意味を探るために、いくつかの辞書を比較してみた。1892年発行の *The American Dictionary of the English language* によると、形容詞の「ブラウン」とは、of a dark or dusky color inclining to red or yellow である。1894年発行の *The American Encyclopaedic Dictionary* では of the color produced when certain substances-wood or paper, for example-are scorched or partially burned とある。が、1905年発行の *A Dictionary of Slang and Colloquial English* には、形容詞としてのブラウンはとりあげられていない。スラングとして特別な意味をもたなかったと考えられる。つまりブラウンとは、あくまでも茶という色のみを意味するのであり、「ブラウンマン」とは単純に茶色の膚をした人間の意味として捉えるべきであろう。

アメリカでは、「主流集団であるヨーロッパ系アメリカ人の視点では“他者”の境界は皮膚の色が基準⁷⁾」である。「ブラウンマン」とは、「ジャップ」のような日本人のみを対象とする蔑称とは異なり、皮膚の色を基準に、“自己”と交錯しない“他者”を定義する“集合的アイデンティティ”の表象の一つとなる。

“人種”が「疑似科学の下で一種のイデオロギーとなり」「基本的な人種・エスニック集団関係は、白人対黒人という二極構造で象徴される⁸⁾」アメリカ社会で、茶色の膚をした「ブラウンマン」とはまさしく、白色人と黒色人のあいだに位置する、つまり白色人でも黒色人でもないすべての有色の人間を内包できる呼称となろう。ゆえに南北アメリカ大陸の先住民や、太平洋諸島・アジア系の人間はすべて「ブラウンマン」と呼ばれる。「支那人と日本人は東洋に於てこそ敵同志の様にいがみ合っても米人から見れば一様にいやな東洋人であり亜細亜人⁹⁾」だったとは、支那人も日本人も同じ「ブラウンマン」であったということであり、先の事例6や10でも見られた通りである。

黒色人でも、混血することで膚の色が茶色になれば、「ブラウンマン」と呼ばれよう。筆者は黒人実業家アンソニー・オヴァトンが1911年にシカゴに設立した化粧品会社、オヴァトン・ハイジーニック製造会社のポスターをもっている。ポスターに描かれているのは白粉をもつ黒人女性で、白粉の名前は「ハイブラウン (high-brown)」である。つまり、白粉を使うことで手に入れる、より“薄い”茶色の膚は「ハイブラウン (high-brown)」と呼ばれているのである。

「ブラウンマン」とは、白色人が明らかに膚の色だけに焦点をあわせ、膚が「ブラウン」である理由が人種の違いか、それとも白色人のあいだで通用する¹⁰⁾ 個人的な特異性—生来的に‘色黒’なのか日焼けなどの人為的結果なのか—にかかわらず、膚の色が茶色の人間を他者化する“集合的アイデンティティ”の表象である。白色人でも黒色人でもない日本人は「ブラウンマン」以外のなにものでもなかったことになる。

3. 「イエロー (黄色)」とは

日本では、戦前の初等教育から、日本人は黄色人種 (イエロー) だと教えられてきた。「ブラウン」と比較するために、次に「イエロー」の意味を考えてみる。

現代の The American Heritage Dictionary of the English Language は、戦前日本の初等教科書同様、「イエロー」の意味の一つとして、designating a person or people having yellowish skin, especially Oriental¹¹⁾ をあげ、「イエロー」が“オリエンタル”—東洋という特定の地域の人間の膚の色と関係があることを明記している。しかし、いつの時代でも明記されていたわけではない。

「イエロー」とは、1892年発行の The American Dictionary of the English language では bright gold color, 1894年発行の The American Encyclopaedic Dictionary では、嫉妬や羨望, メランコリーを表す色と紹介されている。また同書には yellow race があげられ、A term sometimes applied to the Chinese, Japanese, Mongols, Lapps, Esquimaux, &c の意味とされた。1905年発行の A Dictionary of Slang and Colloquial English では、yellow boy が紹介されている。その意味は mulatto, or dark quadroon である。1960年発行の Dictionary of American Slang によると、yellow boy は19世紀初頭から gold coin の意味で使われてきたとするが、yellow girl をあげて、a mulatto girl or woman, a light skinned Negress, especially if sexually attractive の意味とする。同書の「イエロー」の意味でも、describing a light complexioned Negro, especially a light skinned Negress と、膚の色の薄い、つまり混血した黒色人の、とりわけ女性をあげているのが特徴的である。

ムラトリー (mulatto) とは白色人と黒色人のあいだの混血第一世代のことである。dark Quadroon とは黒色人の血が4分の1で、しかも4分の1にしては膚の色が“濃い”人を指す。

最初に yellow man があらわれたのは1814年、1850年にはメキシコ人が yellow fellows と呼ばれた事例や、1867年には yellow niggers との表現もあった¹²⁾。要するに、色として「ブラウン」よりは“明るい”「イエロー」は、黒色人がニグロと呼ばれた時代に、混血したニグロ、もしくはそれに準じる非白色人の膚の色を表現するのに使われた色で、しかもスラングの可能性が高かったと考えられる。

特記すべきことは、上記の資料中、モンゴリアンの意味で yellow race をあげているのは1894年発行の The American Encyclopaedic Dictionary の1種のみであり、いわゆる黄禍論 yellow peril はどの資料にも見出されなかったことである。yellow race があげられても、A term **sometimes** applied to と限定され、まだまだ yellow race の使用は一般的ではなかったことがうかがわれる。つまり20世紀初頭のアメリカでは、「イエロー」と“オリエンタル”を結びつけるコンセプトは比較的希薄で、むしろスラングとして混血ニグロの膚の意味のほうが大きかったのである。

ところが、1938年発行の A Dictionary of American English になると、「イエロー」に、used often with peril, with reference to Chinese or Oriental influence の意味が加わっている。中国もしくはオリエンタルの影響に関連させて“ペリル (危険)”とともに使われると、黄禍論が指摘されるようになった。が、“オリエンタル”の人間と特定する意味はあげられていない。mean-spirited, cowardly, of poor quality, characterized by sensationalism など現代同様の意味とともに、of a person: having a light brown or yellowish skin, of mulatto or quadroon blood と、混血ニグロの膚の色として言及されているのである。同書でも、yellow boy の意味を a mulatto boy or man とする。「アジア系の少年」という意味ではない。

しかも同書では、「ブラウン」の意味の一つとして、mulatto が登場している。つまり、この

ころになると、混血ニグロの膚の色は「イエロー」とも「ブラウン」とも表現されえたのである。

このように「イエロー」がムラトリーや膚の色の薄い黒人種、さらには“性的魅力”まで意味したのはアメリカ英語であった¹³⁾。元来、アメリカ英語では、「イエロー」にアジア系の人間の膚の色の意味をもたせる意識は希薄だった。白色人对黒色人という二極構造のアメリカ社会では、戦前日本の初等教育のような「日本人イコール“イエロー”のアジア人」という等式的コンセプトが存在していたわけではないのである。それは、イギリスのオックスフォード辞典が、「黄色」がモンゴリアンの意味で使われた初出を1834年とした¹⁴⁾のとは大きな違いがある。

1930年代でも、「イエロー」と「ブラウン」にはムラトリーの膚の色の意味があったアメリカ社会の文脈を考えると、1905年当時、日本人を対象に「イエロー」を使うことは奇異に感じられた可能性は否めない。

しかしながら、日本人を「イエロー」と呼ぶ事例がまったくなかったわけではない。が、管見の限り、「ブラウン」よりはるかに少なかった。

中国人や日本人などの黄色人種を脅威とする黄禍論は、シカゴトリビューン紙でも報じられた。が、ヨーロッパ生まれの脅威言説に、アメリカの世論がこぞってとりつかれるようなことはなかった¹⁵⁾。たとえば、「Is There A Yellow Peril!」(1903年6月2日付)では、Of late years the talk of the “yellow peril” has died out. If the yellow peril ever does amount to anything it will be under the headship of Japan と、Japan が使われているし、「Laughs at “Yellow Peril” Talk」(1905年4月9日付)では、If Japan and the United States go to war, as they surely will over the Philippines, with whom will England side, with the **Mongol ally** or with the United States? と、イギリスと同盟を結んでいた日本を“モンゴル人種”の同盟国と呼んでいる。

「イエローマン」が見出されるのは、カナダ滞在中の英国人キップリングの言葉を紹介した記事「Kipling on “Yellow Peril”」(1907年10月18日付)の中である。The way to keep the **yellow man** out is to get the white man in. If you keep out the white, then you will have the **yellow man** と、白色人と対比させて「イエローマン」が使われているが、日本人と特定して「イエローマン」と呼んでいるわけではない。

ルーズベルトが日本人を優遇していると抗議の声を上げた、サンフランシスコの中国人グループに関する記事の見出し「Chinese Protest Favors to Japan-Roosevelt Sent Plea for Equal Rights to **Yellow Men** in California.」(「シカゴトリビューン」1909年2月10日付)にも「イエローマン」が使用されたが、本文中ではJapanese, Chineseが使われている。見出しの「イエローマン」は中国人を指している。

管見の限り、戦前のシカゴトリビューン紙上で、日本人を指して「イエロー」と呼んだ事例はわずか二例である。一つは、By Observer と匿名で書かれた、1912年12月30日付「Menace to World In Doctrines of Pan-Orientalism. Lower Classes of **Yellow Races** Roused to Hatred of Whites by Idea」という記事、もう一つは、太平洋戦争勃発後、FBIの係官がシカゴの日本総領事館に入り、日本人職員を拘束したときに、「a little circle of Americans left with a **small yellow man** in the center」(1941年12月18日付)と報じたものである。前者の記事では、Pan-Orientalism—汎アジア主義がyellow peril となる可能性を警告し、日本人を繰り返し **yellow man, ignorant yellow man** と呼んでいる。記事の論調は強い反日である。

このようにシカゴトリビューン紙では、同じ時期に、頻度こそ違え、日本人の膚の色に言及した「ブラウンマン」と「イエローマン」という二つの“集合的アイデンティティ”の呼称が見出される。しかし両者には、ムラトールの膚の色が「イエロー」「ブラウン」と二種の色で表現されたアメリカ社会の文脈からはまったく異なる、代替不能の意味の違いがある。

つまりアメリカで、「イエロー」に、アジアもしくは“オリエンタル”のコンセプトと意味が付随していったのは、1898年の米西戦争以降アメリカが帝国主義時代に入り、アジアとの利害関係が増して、「黄禍論とは“アジア人のためのアジア”思想”(“yellow peril” is called “Asia for Asiatics”)(Is There A Yellow Peril! 1903年6月2日付)といった認識がじょじょに浸透するようになってから、と考えられるのである。しかも、“アジア人のためのアジア”つまり汎アジア主義の黄禍論とは、「黄色人種が連合して欧米の白人勢力をアジアから追い払い、西洋世界を脅かすという(中略)逆襲の恐怖感と密接に関係していた」¹⁶⁾ことを考えると、「イエロー」の背景には「ブラウン」よりはるかに否定的な国際的文脈があった。しかも「イエロー」には“意地が悪い、臆病といった否定的な意味がある。”シカゴトリビューン紙上で、日本人が「イエローマン」より「ブラウンマン」と呼ばれることが多かったことは、アジア系人口が小さかった中西部において、シカゴトリビューン紙がより中立的な日本(人)観をもち、かつその形成に寄与した可能性を示してはいないだろうか。

やがて、アメリカ社会におけるアジア系の人間の数と種類が増え¹⁷⁾、可視的存在となるにつれ、アジア系の中でも、膚の色の濃淡により、東アジア人をはじめとするモンゴリアンを「イエロー」、フィリピンや南アジア系は「ブラウン」と色を分化させていった。あくまでも膚の色に固執するのがアメリカ的文脈である。たとえば、「Bill will shut door of America to **Asiatic Races**」という見出しで移民法改正を報じた記事(1916年1月23日付)では、the bill includes a paragraph barring “Hindus and all persons of the **Mongolian or yellow race and the Malay or brown race**”という表現がある。第一次大戦後の新たな世界秩序の模索の時代には、yellow and brown menace, yellow immigration (「Australia sees Jap menace in her rich acres」1920年9月7日付)や、汎ツラニズムやイスラム教徒との摩擦などを論じて、yellow or brown warrior (「Science and the rising tide of color」1922年10月3日付)と、アメリカに挑戦する可能性のある外的脅威の表現に「イエロー」と「ブラウン」を混在させる事例も見られるようになった。

日本人に対する「ブラウンマン」という呼称が消えた時期は、帝国主義国家アメリカが直面していた国際的文脈の中で、アジア系の人間が「イエロー」「ブラウン」にと分化していった時代と一致するかのようである。

4. 「リトル」の意味

1892年発行のThe American Dictionary of the English language, 1894年発行のThe American Encyclopaedic Dictionary, 1905年発行のA Dictionary of Slang and Colloquial Englishで「リトル」を比較すると、現代と意味はまったく変わっていない。

現代のThe American Heritage Dictionary of the English Languageで整理すると、「リトル」の意味は以下の通りである¹⁸⁾。

1 small, or smaller in comparison

- 2 short in extent or duration
- 3 small in quantity or degree
- 4 unimportant, trivial, insignificant,
- 5 without much force, weak
- 6 narrow, petty,
- 7 without much power or influence, or minor status
- 8 being at an early stage of growth, said of children and animals
- 9 appealing affectionate, endearing

日本人を「リトル」と表現する意味のうち、日本語に訳して、「背が低い」といった身体的特徴に関連するのは1もしくは2である。確かに、欧米白人と比較すると、平均的日本人が概して欧米人より“背が低い”のは事実であり、納得できよう。たとえば、1906年3月11日付のシカゴトリビューン紙には、「Japanese want more stature. **Little people of Orient** seeking a way to increase their average height, Use of chairs one way, Intermarriage of Taller Southern Japs with Northerners Probable Remedy」といった記事が出ているほどである。事例1の黒木大将を「リトルブラウンマン」と呼んだ「リトル」の意味である。

しかし、4以下の意味も無視することはできない。なぜなら、筆者の管見からすれば、「つまらない、重要ではない、弱い、無力、姑息、子供っぽい、愛らしい」といった意味こそ、日本開国以降、アメリカ(人)の日本(人)観の根底に潜んできたと考えるからである。

日米外交史の嚆矢、たとえば1858年の日米修好通商条約は、「子供のような日本が、西洋列強の強烈な軍事力を背景にした外交攻勢の前に必ず立ち往生することを見通し」たアメリカが、「幼い日本の後見人のようにアメリカがふるまうことを他の列強に知らしめ、かれらが過度な帝国主義的要求を控えるように牽制」¹⁹⁾するものであった。旧宗主国イギリスの圧政に反発して独立を勝ち取ったアメリカは、ときにこうした優しさを見せるといふ²⁰⁾。そして、日本をも文明国となすべき使命感=強迫観念によって、アメリカは「開国と通商」を要求した²¹⁾。

その後、帝国主義国としては後進の日米両国は、中国をめぐる覇権競争を繰り返して、太平洋戦争に突入したが、戦時中に作成された対日戦略文書でも、「リトル」は使われていた。

in every sense of the word the Japanese are *little people*. Some observers claim there would have been no Pearl Harbor had the Japanese been three inches taller... (中略) Being *little people*, the Japanese dreamed of power and glory, but lacked a realistic concept of the material requirements for a successful world war.²²⁾

little people とイタリック体なのは意味を強調するためである。あと3インチ背が高ければ真珠湾攻撃はなかっただろう、「女」のように小さく“弱い”がために、奇襲のようなずるいことをせざるを得なかった²³⁾と、日本人の身体的特徴を“劣等感”として揶揄しながら、「半ズボンをはいた日本人は身の程知らずの画餅を描き、少年がおもちゃで戦争ごっこをするように」²⁴⁾、「リトル」ゆえに権力と栄光を求めたと、「リトル」の“器の小ささ”“姑息”の意味を最大限に強調した。

使命感をもったアメリカの開国要求と「“リトル”ゆえに権力と栄光を求めた」という日本認

識は、膚の色が「ブラウン」である他者を、「つまらない、重要ではない、弱い、姑息、子供っぽい、愛らしい」と呼ぶ意識と密接な関係がある。それは、1905年6月24日付の記事で、Richard Weightmanが自嘲気味に表現した“cry of “White Man’s Burden”—“白人の重荷”，別名パターンナリズムである。

III リベラルパターンナリズムと日本

1. “親心”

パターンナリズムとは、日本語で「父親的な温情主義、おしつけがましい干渉主義」と訳されている²⁵⁾。前出の The American Heritage Dictionary of the English Language によると、A policy or practice of treating or governing people in a fatherly manner, especially by providing for their needs without giving them responsibility²⁶⁾ とある。父親的な態度で、責任は与えずに、必要なものを供給するやり方で他人を管理する、とはまさに幼児を育てる親のそれである。つまり、日本人を「リトル」と呼ばせているのは、日本（人）を「まだ成長していない子供」と見るアメリカ（人）のパターンナリズムの感覚・意識である。

たとえば、先に紹介した1903年6月2日付記事「Is There A Yellow Peril!」は、It is the custom in this country to admire the Japanese, but in a **patronizing way; to pat them on the head as precocious children** で始まる。アメリカ人は日本人を、“恩着せがましい”やり方、つまり発達の早い、早熟な子供の頭をなでるようにして賞賛する、とアメリカ人自身が認めているのである。

シブサワは、アメリカのパターンナリズムを、植民地主義的パターンナリズムと区別して、リベラルパターンナリズムと呼ぶ。²⁷⁾ 植民地主義的パターンナリズムとは、アジア・アフリカ諸国を原材料の供給地にとどめておくために植民地化したヨーロッパのそれであったのに対し、植民地主義に反対して生まれた国、アメリカのリベラルパターンナリズムとは、“か弱く、力あるものに依存せざるを得ない女・子供”の成長発展を助け、いち早く民主的な政治経済体制を築くための“助言者”“保護者”となることを自らの役割とするものである。それは、“正しく育てれば、正しく成長する”と考える“親心”でもある。

日本人に対する“親心”の直接的表現は、シカゴ大学の野球チームが日本へ行き、早稲田大学と慶応大学のチームと対戦したときの1910年10月6日付の記事に見出せる。

JAP BALL TEAMS SURE OF VICTORY-Ted Jones Writes that **Brown Sons of Orient Hope to Beat Maroons**. ... The agile **little brown sons** of Waseda and Keio universities, still glorying in the memory of an “even break” with the husky university of Wisconsin ball team a year ago,...

東京のジャパンアドバイザー紙からの転載記事の中で、日本人選手は、“オリエントの息子(son)”“小さなブラウンの息子(son)”と呼ばれている。著者のTed Jonesは、先述の事例3にも現れるウイスコンシン大学広報部のNed Jonesであろう。

Sonの意味は、1892年発行のThe American Dictionary of the English Languageでは、a male

child or descendent, any young male person spoken of as a child, a term of affection, disciple, a native or inhabitant, 1894年発行のThe American Encyclopaedic Dictionaryでは、the form of address used by an old man to a young one, by a father confessor to his penitent, by a priest or teacher to his discipleとある。血縁関係も含めた具体的な家族関係を表すと同時に、年配者から青年、司祭から懺悔者、牧師や教師から弟子へとといった呼びかけの意味に加えて、“土着の住民”という意味もあった。日本人が「息子」と呼ばれたのは、明らかに“上から目線”で“土着の住民”を見る「親心」によるものである。

シブサワによると、アメリカのパターナリズムはセクシズムをもち、アメリカが非白人の国に民主化する可能性を見るときは‘青年’ (young male) と称し、その可能性に疑問を感じる時は‘バカな女’ (foolish woman) と表現する傾向があるという。²⁸⁾ この分析によると、アメリカの“親心”に依存しながら近代化をはかり、開国から日清・日露戦争を経て、第一次大戦に参戦するあたりまで伸び盛りだった日本はあきらかに“少年”から“青年”へと成長していると認識され、アメリカにとって「リトル」な存在であった。

一方アメリカは、1894年の米西戦争以降、キリスト教伝道と“文明”流布の思想を結びつけ、福音主義的の道徳改革の強い響きをもった²⁹⁾ “親心”を、アメリカ国家の「明白なる命運」によってさらに美化・正当化して、“ブラウンマン”の世界つまりアジア・太平洋地域に進出しはじめた。

野球とは、1898年以後、太平洋地域を主な対象にアメリカ大衆文化の輸出品となり、アメリカの占領地となったフィリピン、キューバ、プエルトリコでも教えられたスポーツである。³⁰⁾

sonが、「ブラウンマン」に対するパターナリズムの気持ちから出た言葉であり、野球がその“親心”のツールであったとき、野球を学ぶ日本人は、アメリカ人にとって“リトルブラウンの息子”以外の何物でもなかったことになる。

事例2から5の野球記事の「リトル」は、学習能力の高い日本人を「弱い、無力、子供っぽい、愛らしい」存在と肯定的に見る「親心」である。

2. 二面性

しかし、アメリカのパターナリズムが善意の顔を見せるのは、あくまでも“子供”が自分の腕の中において“従順でかわいい”限り、である。「米人も日本がよちよち歩く子供時代には眼にも入れたいほどかわいかったであろうしかし一人前の男になって隣の悪童を凝らす様になってはかわいいどころかこいつ小生息だといくらしくなっ」³¹⁾ てくると、相手を自らに挑戦してくる“敵”とみなし、疑いと恐れのお気持ちを抱くようになる。

「リトルブラウンマン」の呼称が現れた1905年は、アメリカの戦略的思考が日本を恐るべき“敵”として意識しはじめた年である³²⁾。翌年には、アメリカ海軍は日本を仮想敵国とした検討を開始した³³⁾。時の大統領は、「棍棒を手にしつつ穏やかに話す」をモットーする³⁴⁾ パターナリズムの塊のような白人優位主義者セオドア・ルーズベルト (任期1901 - 1909) である。アメリカが支配下においたフィリピン人を“いいインディアン”にするにはなぐるしかない、と考え³⁵⁾、日本人に対しては、足元を見られているような猜疑心をもち、1911年に発表した手記の中で「日本人には最善を尽くして丁重に扱ったが、どうもかれらのコミュニケーションの底流には獐猛なものがおし隠されているような気がして居心地よくなかった」との言葉を残した。(「シカゴ

トリビューン」1920年3月1日付)

“恐れ”があると、その“埋め合わせ”に、相手の価値を剥奪しようと相手の人間性を奪おうとする行為 (dehumanizing) が生れる³⁶⁾。事例6から12のアジアと移民関連の記事は、日本人を“ライバル”“脅威”と見なした内容である。当然「リトル」の意味も、「弱い、子供っぽい、愛らしい」から、相手の価値を剥奪するために「つまらない、重要ではない、姑息」といった否定的な意味を強調するものに変化していると理解されるべきであろう。

1905年から1921年のあいだに散見された「リトルブラウンマン」の呼称は、「背の低い茶色の膚の人間」という日本人の身体的特徴を強調する中立的呼称というよりはむしろ、この時代にアメリカが日本に対して抱いたパターナリズムの二面性—つまり日本を“かわいい”と考える“優しさ”と、欧米列強と肩を並べる力をつけた日本に対する“不安”“恐れ”—を、アンビバレントな「リトル」が浮上させた表現といえるのではないだろうか。

IV おわりに

以上、20世紀初頭のシカゴトリビューン紙に現れた、日本人に対する「リトルブラウンマン」という呼称に焦点をあて、「リトル」からは変わることのないアメリカのパターナリズムを、「ブラウンマン」は「イエロー」との比較からその意味を読み解こうとした。

その結果明らかになったのは、「異人種と実際に皮膚の色を比較する機会も必要もなく、写実的に（淡褐色とか薄茶色とか一筆者）皮膚を記述するコトバを持っていない日本」³⁷⁾ 社会とは違い、日々常に異人種との差異を身に刻み込み、膚の色から他者を規定しようとする単純明快な自他意識が存在するアメリカ社会では、日本人に与えられた「ブラウンマン」という呼称は現実的かつ実にアメリカ的な表現だったことである。しかも19世紀のアメリカ英語では、スラングの「イエロー」は白色人と黒色人の混血ムラトリーの膚の色を意味した。ムラトリーも日本人も同様に「イエロー」とも「ブラウン」とも呼びえた時代があったことは、アメリカ社会における膚の色とは、決して「日本人イコール黄色人種（イエロー）」といった固定的・学問的人種観念に縛られることなく、流動的な時代背景や社会的文脈の変化とともに、そのニュアンスを理解せねばならないものであることを示唆していよう。

今後の課題は、まず第一に、日本人に対する「リトルブラウンマン」の呼称が、中西部のシカゴトリビューン紙に限らず、同時代のアメリカの他地域の新聞でも使われていたかどうかの検証である。

第二に「ブラウンマン」の呼称を、多民族社会のパーспекティブにおくことである。つまりアフリカ系や中国系、フィリピンやインド、メキシコ系、アメリカインディアンなど他のエスニックコミュニティとの関連を調べることで、「ブラウンマン」の意味はより深化するだろう。

現代アメリカで生活する筆者にとって、「日本人は“ブラウンマン”」に何の違和感も感じないというのが日常の皮膚感覚である。四半世紀を越えるアメリカ生活で、筆者自身が、面と向かってではないにしろ「ブラウンガール」と呼ばれたり、職場で、白人女性のカウンセラーから「あなたは“ロッキーブラウンチョコチョコレート”のアイスクリームよ、同僚はなめらかな“バニラ”アイスクリームが大好きなの」と、“白”との対比を強調された経験をもつ。スージー・

ブキャナンの「ザ・リフト」³⁸⁾では、アフリカ系とラティノ・ヒスパニック系の連帯が、the black/brown coalition と呼ばれ、ラティノ・ヒスパニック系が“ブラウン”とされている。現代の若い極右白人至上主義者たちの中には、米軍兵士としてイラクやアフガニスタンに派遣される者がいる。かれらは“敵”を“ブラウン”と呼び、“ブラウン”の殺害に誇りをもっているという³⁹⁾。現代アメリカでも、非白人を「ブラウンマン」と呼ぶ他者化意識は生き続けている。

これまでの日系移民史研究では、「日本の研究者は（中略）“日本人対白人”という二項対立で見る場合が多く、“多文化”の交渉と葛藤を背景とした移民体験の分析にはほど遠い状況」⁴⁰⁾にあった。20世紀初頭に現れた、たとえ時代・地域を限定されたものであったとしても、日本人に対する「リトルブラウンマン」という呼称への認識は、アメリカの包摂的文脈に日本人をおくことで、対白人に拘泥しない、より広い、普遍的な人種問題への意識の覚醒を促すことだろう。その意味で、「リトルブラウンマン」の呼称は現代的意義をもっていたと言えるだろう。

注

- 1) 竹沢泰子「『白人』と『黒人』の間で―日系アメリカ人の自己と他者」青木保也編『講座文化人類学 第7巻―移動の民族誌』(岩波書店, 1996年), 283頁。
- 2) 田中義廉「小学読本第一」海後宗臣編『日本教科書体系近代編第4巻 国語(1)』(講談社, 1964年), 101頁
- 3) 海後宗臣「所収教科書解題」海後宗臣編『日本教科書体系近代編第4巻 国語(1)』(講談社, 1964年), 711頁
- 4) 内田嘉一「小学中等科読本巻ノ四」海後宗臣編『日本教科書体系近代編第4巻 国語(1)』(講談社, 1964年), 426頁
- 5) 1890年の国勢調査によると、イリノイ総人口3826352人のうち、白人は3768472人(98.4%), ニグロは57028人(1.5%), その他852人で、その内訳は、文明化した(居留地を離れた)インディアンが98人、中国人が740人、日本人は14人である。そのうち、シカゴ市の人口は白人1084998人、ニグロが14271人、中国人567人、インディアン14人で、日本人はいなかった。シカゴ市人口総計1100332人のうち、アメリカ生まれ649666人(59.04%), 外国生まれ450666人(40.95%)であった。
- 6) 山室信一『日露戦争の世紀―連鎖視点から見る日本と世界』(岩波新書, 2005年), 113頁。
- 7) 竹沢泰子「『白人』と『黒人』の間で―日系アメリカ人の自己と他者」青木保也編『講座文化人類学 第7巻―移動の民族誌』(岩波書店, 1996年), 277頁。
- 8) 竹沢泰子「『白人』と『黒人』の間で―日系アメリカ人の自己と他者」青木保也編『講座文化人類学 第7巻―移動の民族誌』(岩波書店, 1996年), 265頁。
- 9) 大橋忠一「北米排日史」『移民情報』第一巻第4号(1929年): 5-6頁。
- 10) J.A.Simpson, *The Oxford English Dictionary 2nd Edition*, (Oxford: Clarendon Press, 1989): 592
- 11) William Morris, *The American Heritage Dictionary of the English Language*, (Boston: Houghton Mifflin Company, 1981): 1483.
- 12) William A. Craigie, *A Dictionary of American English*, (Chicago: University of Chicago Press, 1938): 2519.
- 13) J.A.Simpson, *The Oxford English Dictionary 2nd Edition*, (Oxford: Clarendon Press, 1989): 718
- 14) 眞嶋亜有「『肌色』の憂鬱 近代日本の人種体験」(中央公論新社, 2014年), 54頁
- 15) ハインツ・ゴルヴィッツァー『黄禍論とは何か』(草思社, 1999年), 72頁
- 16) 飯倉章『イエロー・ペリルの神話 帝国日本と「黄禍」の逆説』(彩流社, 2004年), 22頁
- 17) 1910年の国勢調査では、1900年の調査であげられた白人、ニグロ、インディアン、中国人、日本人

以外に、ヒンズー、韓国、フィリピン、マオリが加わり、多様性を増している。

- 18) William Morris, *The American Heritage Dictionary of the English Language*, (Boston: Houghton Mifflin Company, 1981): 763.
- 19) 渡辺惣樹『日米衝突の根源—1858 - 1908』(草思社, 2011年), 189 - 90頁
- 20) 同上 200頁
- 21) 松本健一『日本の失敗—「第二の開国」と「大東亜戦争」』(岩波現代文庫, 2006年), 2頁.
- 22) Bonner Fellers, *Answer to Japan*, (General Headquarter South West Pacific Area, 1944): 20 .
- 23) Naoko Shibusawa, *America's Geisha Ally Reimagining the Japanese Enemy*, (Cambridge: Harvard University Press, 2006): 173,
- 24) 同上 24頁
- 25) 小稲義男他『新英和中辞典』(研究社, 1985年), 1208頁
- 26) William Morris, *The American Heritage Dictionary of the English Language*, (Boston: Houghton Mifflin Company, 1981): 960
- 27) Naoko Shibusawa, *America's Geisha Ally Reimagining the Japanese Enemy*, (Cambridge: Harvard University Press, 2006): 19
- 28) 同上 57頁
- 29) イアン・ティレル『トランスナショナル・ネーション アメリカ合衆国の歴史』(明石書店, 2010年), 229頁
- 30) 同上 172 - 73頁
- 31) 大橋忠一「北米排日史」『移民情報』第一巻第4号(1929年): 5頁。
- 32) 松本健一『日本の失敗—「第二の開国」と「大東亜戦争」』(岩波現代文庫, 2006年), 10頁.
- 33) 渡辺惣樹『日米衝突の萌芽—1898 - 1918』(草思社, 2013年), 207頁
- 34) 宇佐美滋『アメリカ大統領を読む辞典—世界最高権力者の素顔と野望』(講談社+アルファ文庫, 2000年), 325頁
- 35) E. San Juan Jr, *African American Soldiers in The Philippine Revolution (1899-1903) Solidarity in Practice Against the US Empire* (<http://philcsc.wordpress.com/2009/06/27/african-american-soldiers-in-the-philippine-revolution/>): 3
- 36) Jerry Garcia, *Looking Like the Enemy-Japanese Mexicans, the Mexican State, and US Hegemony, 1897-1945* (Tucson: University of Arizona Press, 2014):51
- 37) 我妻洋, 米山俊直『偏見の構造—日本人の人種観』(NHKブックス, 1967年), 78 - 79頁
- 38) Susy, Buchanan, "The Rift", *Intelligence Report, Summer* (2005): 10-15
- 39) David Holthouse, "Killing a Brown", *Intelligence Report*, winter (2008): 13-15
- 40) 東栄一郎「アメリカ移民史研究の現場から見た日本の移民史研究」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』(御茶の水書房, 2011年), 32頁。